（六）火伏修行

火伏の修行

聖衆寺の春の大法要は、柴燈大護摩を修行し其の護摩の火の上を行者が先に歩き、引き続き参拝の信者も火の上を歩かせるのが恒例になっていました。聖衆寺の奥さんが「来年の春の秋葉権現の大祭には、師僧の代りに弟子の聖規が導師となってやって下さい。あなたなら、もう出来る筈だ。」と申されたのです。私は言下に「柴燈護摩や火渡りの秘密の法は、お授けしてもらっていませんから、とても出来ません。」とお断りしたのです。奥さんは「これからお授けを受けて修行すれば、必ず出来ますから。」とおっしゃるのでした。

聖衆寺は、真言宗醍醐派に属して修験を重んじていました。私は、―これはえらい事になった。失敗すれば寺の信用にかかわる事であり信者に火傷させたら大変だ―と、責任を強く感じました。しかし、成功すれば法力の自信も出来ると思い、その大役をお受けしました。

そして金峯山修験道の大先達の北村清阿闍梨の門をたたきました。初対面の私の姿をまじまじと視て「君ならば、柴燈護摩及び火渡りの秘法を授けても惜しくは無い。すぐこの場で伝授しましょう。先ずこの次第を写しなさい」と秘法の次第を私のまえに置いて下さいました。次第を写し終って、秘法が授けられ、柴燈護摩の準備や、火渡りの仕方等詳細な所まで教えて頂きました。

然し法は伝授を受けたのみでは、法力を顕す事は出来ません。この秘法の錬行のために、寒修行として、夜の十二時過ぎから、氷を割って其の下の水を不動真言一返念じて柄杓一杯の水をかぶる事を百八回行ずる事を、昭和廿二年一月六日より一ヶ月の修行を致しました。

其の行を終えてから尾張御嶽山といわれる黒平山に参籠して、廿一日間柴燈護摩の加行を修行する計画を立てて、三月の中旬山に登りました。山の頂上に古びた参籠所があり、誰も住んでいません。勿論、寝具も炊事道具も電気もない山の小屋ですが、雨露にぬれぬだけでも有難い場所であります。持参の飯盒で飯をたき、大根や人参、長芋等をおろし金ですり、醤油をかけて食し、一日に不動真言を一万返念誦して、夜になると五百メートル程下にある滝場へ行き枯枝を拾い集めて火を焚き、滝に打たれ乍ら火伏の印と真言を念じてから、燃えさかる火の中に仁王立ちに立って、法力の成就を試すのです。いくら一生懸命に念じても、五秒も火の中に入っておれません。それを何回も繰り返し、繰り返し錬行しました。一日、二日、三日間は、全く火伏が出来ませんでした。四日目に成って漸くして、火伏の法力が成就して一分間位火の中に立てるようになりました。五日目は大雨になり、滝場に下りる事が出来にくく、又火を焚いての修行は困難と思い、山の頂きの参籠所で修行し、翌日の六日夜、滝行して火伏をしました。ところが意外にも火は熱く、五秒間も火の中に立つ事が出来ません。昨日の大雨で一晩滝の修行が出来なかった事で、法力を

失ってしまったのです。もう一返始めからやり直そう。今度は雨が降ろうと氷が降ろうと、夜の滝行を修して、火伏の法力を成就しようと、心に固く誓ったのです。

前回以上の努力をすること五日目、やっと一分間ぐらい火の中に立てるようになりました。最初の計画通り、二十一日間の修行を終えて、頂上の秋葉権現様のお社の前の広場で紫燈護摩の実修をしようと考えていた時、法友のA君が修行見舞いに来てくれました。これこそ天の助けと、A君に手伝ってもらい、太い枯枝を集めて積み重ね、周囲を桧葉でおおい、山火事を防ぐために水も用意して、伝授された通り、紫燈護摩を生まれて初めて修行しました。

さいわいに強い風もなく、順調に修行し、その護摩の火を四メートル程にひろげて、水天、龍神を招請して火伏の印を結び、ご真言をとなえました。火の色が変わるのを見て、ぞうりをぬぎ、素足で火の中を一直線に歩いて渡り越しました。法友のA君も引き続いてわたり、無事に実修を終り、三重県桑名市の聖衆寺へと急ぎました。

秋葉権現の大祭

昭和二十二年四月十六日、土仏山の頂上の護摩堂前の広場に、紫燈護摩の諸準備が出来上がりました。未熟な若僧の私が晴れがましい大祭の責任をまかされているのです。夜になってもなかなか寝つかれず、外がうっすら明るくなるのを待って外へ出てみると、天気も晴れのようです。護摩堂では、もう奥さんが護摩供を始めかけておられました。私は後方で、今日の大法会の無事を祈りました。

空はすっきり晴れ上がり、おそ咲きのぼたん桜が朝の光を受けて、とても美しくかがやいております。お手伝いの信者さんも早朝より大勢おまいりされ、各持ち場を喜々として御奉仕下さる姿に頭の下がる思いがしました。

定刻の十時、松明係二人を先頭にして、私とA君は、結界の縄張りの中に入場しました。四人とも本式の紫燈護摩は初めての新米ばかりですから、達人の方が来ておられたら、さ

ぞかし歯がゆかったでしょう。

しかし私たちは必死に祈り、如法に修行しました。白煙は空高く上がり、火焔は桧葉を焼いて火柱となります。松明係は適当に水で火をおさえながら、信者等の申込みの護摩木を火の中に投じます。『信者の過去の罪も、病気・災難も護摩の浄火で、すみやかに消滅なしたまえ』と二千本の添護摩木を総て終了したころは、全員汗びっしょりです。

一時間ほどかかって護摩は終了しましたが、骨組みになった直径十五センチメートルぐらいの段木は、全部生木ですから焼けきってはいません。用意してあった「トビ口」でその段木を両脇にのけ、その中にある燃えきった火を生木のぼうで押しひろげて長さ四メートルぐらいにのばしました。そして、わが守り本尊の「不動尊、火伏の秋葉権現、水天、竜王」の御名を一心に唱えて招請しご真言をお唱えしました。

「火の色がかわったら火渡りをせよ」と阿闍梨様に教えられた通り、自分がまっ先に渡りました。続いて三人の助法者、熱心な信者達が次々と渡りました。全員タビをぬいで素足で渡りましたが、一人も火傷はしていません。

参詣の信者さんたちの「これで厄をはらってもらった」と喜び帰宅される姿に、私は心から御守護して下さった神仏に感謝しました。